信州の「三太郎」

小松 和彦

携帯電話会社のCMに「三太郎」シリーズというのがある。童話の主人公、桃太郎、浦島太郎、金太郎の三人の「太郎」が一緒になってコミカルな寸劇を演じるもので、長く人気を博している。これにあやかって、信州の「三太郎」を探すと、「物くさ太郎」「小泉小太郎」(もしくは「泉小太郎」)「早太郎」の名が思い浮かんできた。

「物くさ太郎」は『御伽草子』に収められた話で、筑摩郡あたらしの郷に住む、あきれるほどのものぐさな男が、都に赴いたところ、今度は驚くほどまめまめしく働き、清水寺の門前で見初めた貴族の姫を妻に迎え、さらに皇孫であることも明らかになって信濃の領主となり、死後は穂高の神となったという痛快な話である。この話にゆかりのある穂高神社や松本市新村などには、太郎の碑や像が建てられている。

「小泉小太郎」は上田地域に伝わる、人間の男のもとに女に化けた大蛇が通い、男の子を産んで川に流し、老婆がその子を拾い上げて育て、成人して不思議な力を発揮したという話で、「泉小太郎」のほうは松本地域に伝わるもので、大蛇(竜)の子が母の大蛇と協力して、大きな湖であった松本の地を開鑿(かいさく)して盆地に変えたという話である。

いずれも名前が「小太郎」で、大蛇の子が人間の男の姿で生まれ、後に英雄的な活躍をする点で似ており、もとは一つの話が分かれたらしい。童話作家・松谷みよ子の『龍(たつ)の子太郎』は、この二つの伝説をもとにして創られたことでも知られている。

物くさ太郎は神の「申し子」、小泉小太郎は「半妖・半蛇」。これに対して、「早太郎」は人間ではなく「山犬」である。

駒ヶ根市の光前寺の床下に、妖怪を追い払うほど強い山犬が住んでいた。その名が「早太郎」。昔、信州の南の遠州・磐田市の矢奈比賣(やなひめ)神社では、祭りの夜、村の娘を怪物(猿の化け物の狒々(ひひ))に人身御供として差し出す習慣があった。旅の僧がこの怪物が「信州の早太郎」を怖れていることを知り、早太郎を探し求め、ついに光前寺の山犬を探し出し、この犬のお陰で怪物を退治した。

興味深いことに、この伝説が矢奈比賣神社のほうにも伝えられており、しかもいずれの地でもこの霊犬を祀っていて、その縁で両市は友好都市提携まで結んでいるという。

信州の「三太郎」もそれぞれユニークで面白い。セットにして宣伝したらどうだろう。

(こまつ かずひこ
国際日本文化研究センター名誉教授)